「機能連携広域経営型」モデル

計画的地域活性化インフラ・プロジェクト推進

総務省・地域の元気創造有識者会議

4

後藤春彦
hgoto@waseda.jp

地域をとりまく背景と課題

「人口減少社会」と「少子高齢社会」のみならず、
「高流動性社会」への転換期と捉える

⇓

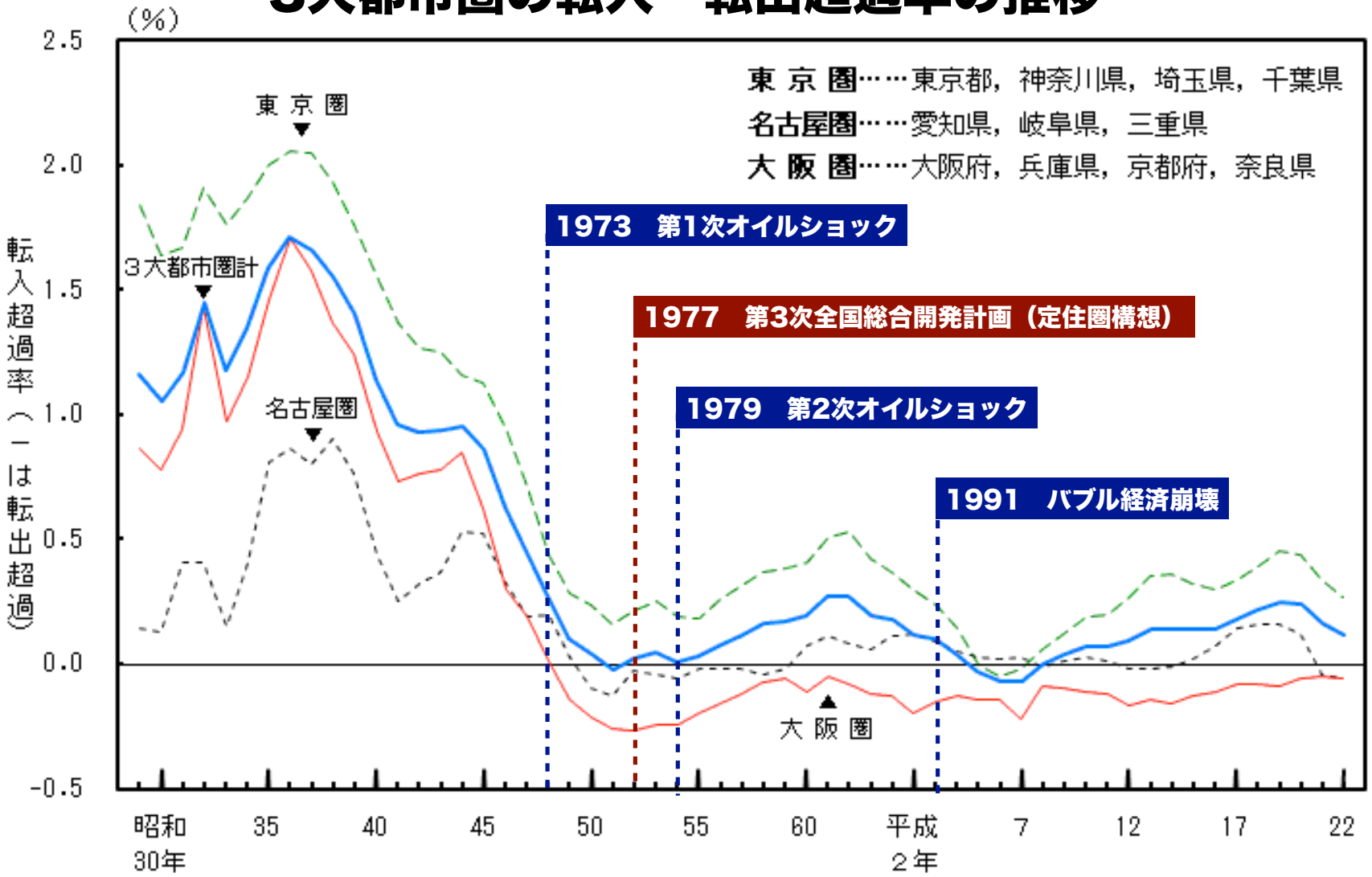
「高流動性」こそが
「地域の元気（ドライビング・フォース）」

- ひとの流れ
- モノの流れ
- お金の流れ
- エネルギーの流れ
- 情報の流れ

国土の均衡ある発展　から

個性を活かし自立した
『計画的圏域』City Region の構築　へ

3大都市圏の転入・転出超過率の推移



総務省統計局　住民基本台帳人口移動報告　より

『国土の均衡ある発展』　（再配分の論理）
から
『個性を活かし
自立した地域をつくる』　（元気創造の論理）
へ

↓

地方圏から三大都市圏への人口流出の歯止め
地方圏への人口流入の創出　のみならず、
地域に暮らしつづけるための条件整備

機能連携広域経営型モデルとして

定住自立圏の強化

↓

多様な City Regions が個性を競い合う 元気 !!

基礎自治体の範囲をこえた社会的ネットワークを『計画的圏域』City Regionとして設定する

（1）**範域**の設定　（最適で効率的な投資圏域）

ひとの流れ、モノの流れ、お金の流れ、
エネルギーの流れ、情報の流れ

（2）**意思決定機構**の設定　（明確なガバナンスの存在）

ガバナンス・システム
PPP産学金官民ラウンド・テーブル
戦略的対話のためのプラットフォーム 他

（3）**共発的サービスの担い手と仕組み**の設定

有限責任会社、特定目的会社
NPO
市民自治 他

基礎自治体を単位とする
総合計画（基本構想＋基本計画）に加えて、
計画的圏域 City Region を単位とする
Spatial Planning Frameworkの導入

行政的公共性、市民的公共性、市場的公共性　に基づく
包括的・戦略的な計画の枠組み

＋

地方政府、市民、地元企業（金融機関）、大学・研究機関連携
都市と農村地域の連携
住民自治組織から、地方政府・中央政府の連携
機能連携・広域経営

⇓

自立的かつ競争力を兼ね備えた計画的圏域における
共発（外発と内発のハイブリッド）的地域づくりの展開

計画的な地域活性化インフラ・プロジェクトの推進

1 持続可能な居住のための『三種の神器』（医療・雇用・教育）の高度化

2 QOLを支える『5つの流れ』（ひと・モノ・お金・エネルギー・情報）を新たな社会基盤として敷設

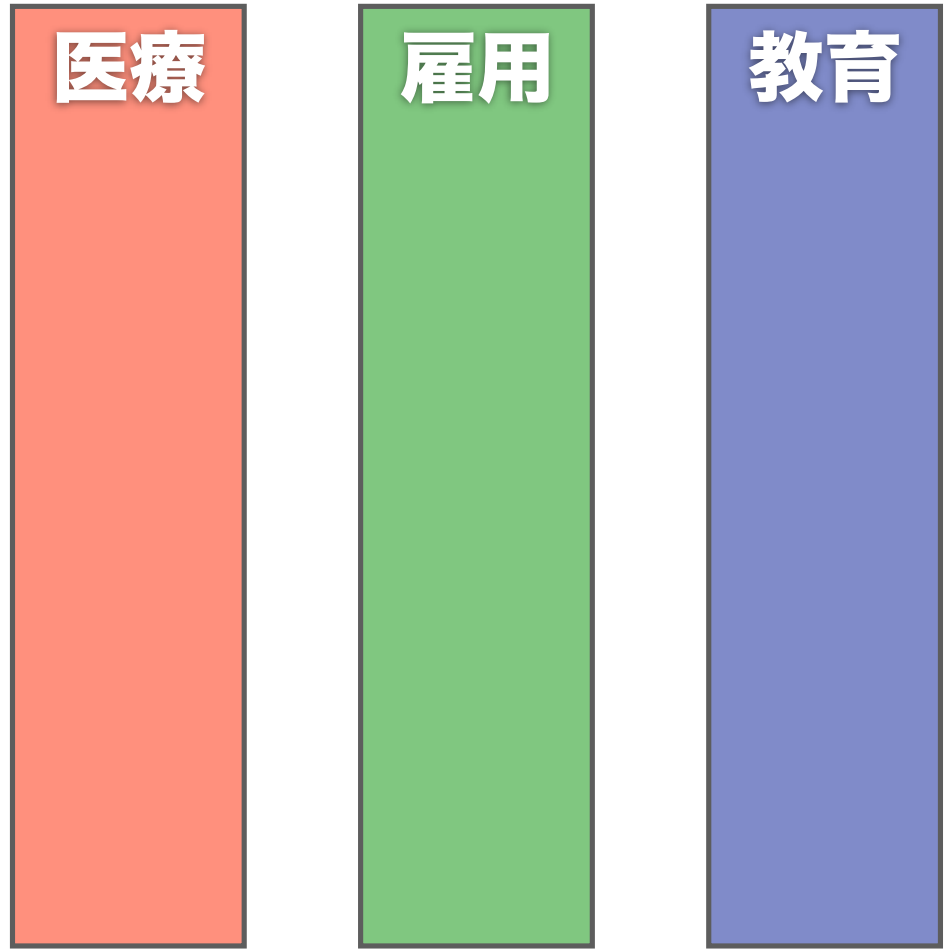
『集約とネットワーク』による
圏域資本（テリトリアル・キャピタル）の向上

↓

フルセットで公共投資を進めるのではなく、
圏域の「生活機能」に加え
「都市機能」の高度化をめざし、

「無駄のない最適な投資」と「民間投資のフル活用」

高流動性社会における
圏域の新たな価値創造をめざす社会基盤の枠組み
Spatial Planning Framework



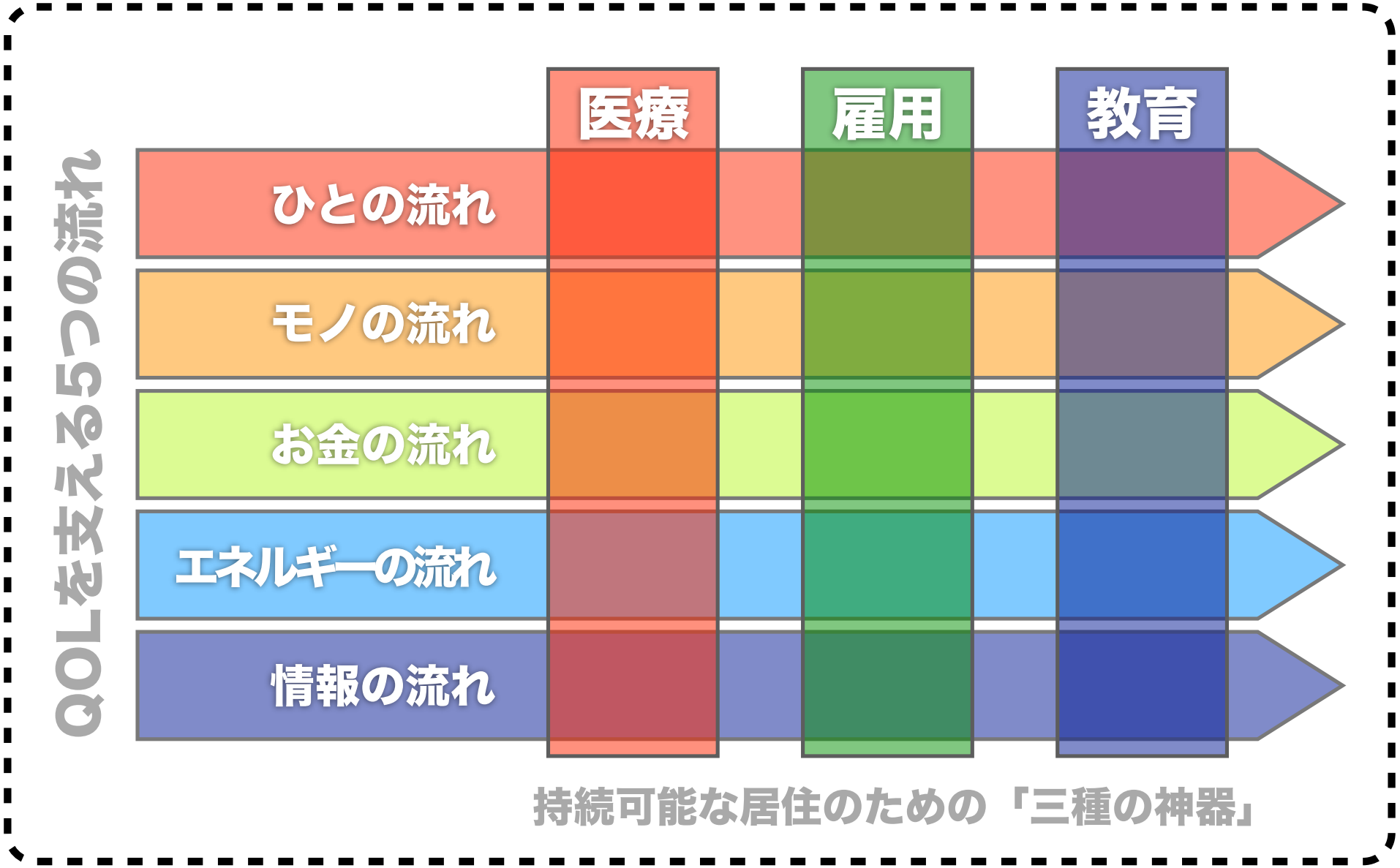
持続可能な居住のための「三種の神器」

高流動性社会における
圏域の新たな価値創造をめざす社会基盤の枠組み
Spatial Planning Framework

QOLを支える5つの流れ

ひとの流れ	モビリティ
モノの流れ	ロジスティックス
お金の流れ	ファイナンス
エネルギーの流れ	再生可能エネルギー スマートグリッド
情報の流れ	ICT 公共クラウド

高流動性社会における
圏域の新たな価値創造をめざす社会基盤の枠組み
Spatial Planning Framework

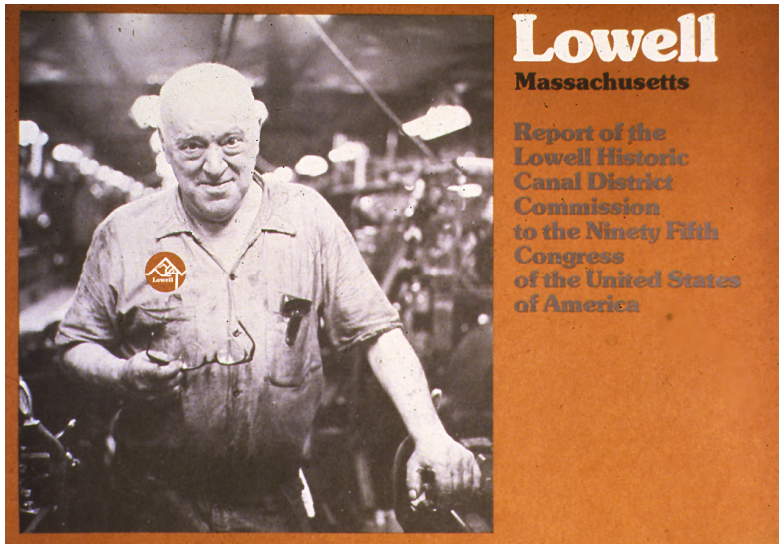


高流動性社会における
圏域の新たな価値創造をめざす社会基盤の枠組み
Spatial Planning Framework

Spatial Planning with the *Kyohatsu* Model
共発モデルによる地域づくり

Lowell; ローウェル

towards a Theme City Region to Create Self Image
セルフイメージを創出する物語のある都市／地域へ



アメリカのマサチューセッツ州のローウェル（ボストンから40マイルほど北）は、アメリカで一番最初に産業化された都市ということで知られている。
地域内外の力を統合し、産学金官が協働して、テリトリアル・キャピタル（圏域資本）としての産業遺産を文化や教育、観光の対象として活用したモデルケースと評価されている。

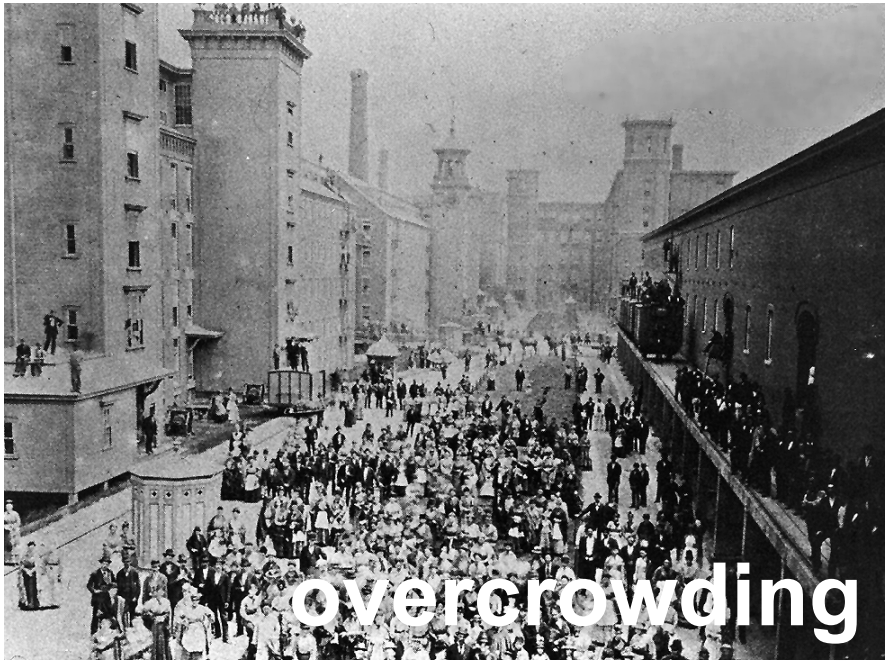
図提供／Prof. Dennis Frenchman, MIT

Utopian Vision

Mill Girls

メリマック（Merrimack）川沿いに立地するローウェルは、1823年に水力を活かした工業都市として誕生した。
当時のローウェルは一種のユートピア的な都市であり、周辺の農村から女性がミルガール（女工）として働くことにあこがれてやって来た。

図提供／Prof. Dennis Frenchman, MIT



しかし40年余り経ると、移民が増え、過密が進み、居住環境は悪化の一途をたどり、かつてのユートピアの影は消え、公害、劣悪な労働環境等がローウェルの代名詞になった。
ストライキや労働関係の争議は後を絶たず、児童の工場就労などの問題も起こった。

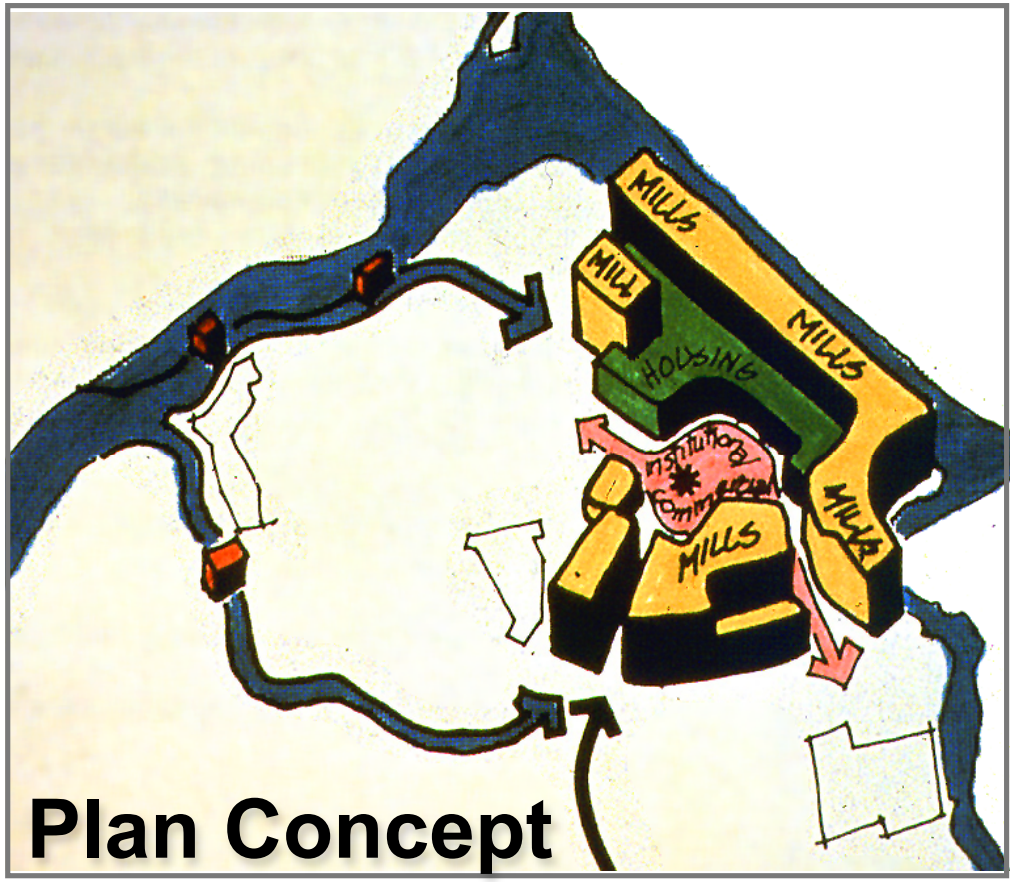
図提供／Prof. Dennis Frenchman, MIT

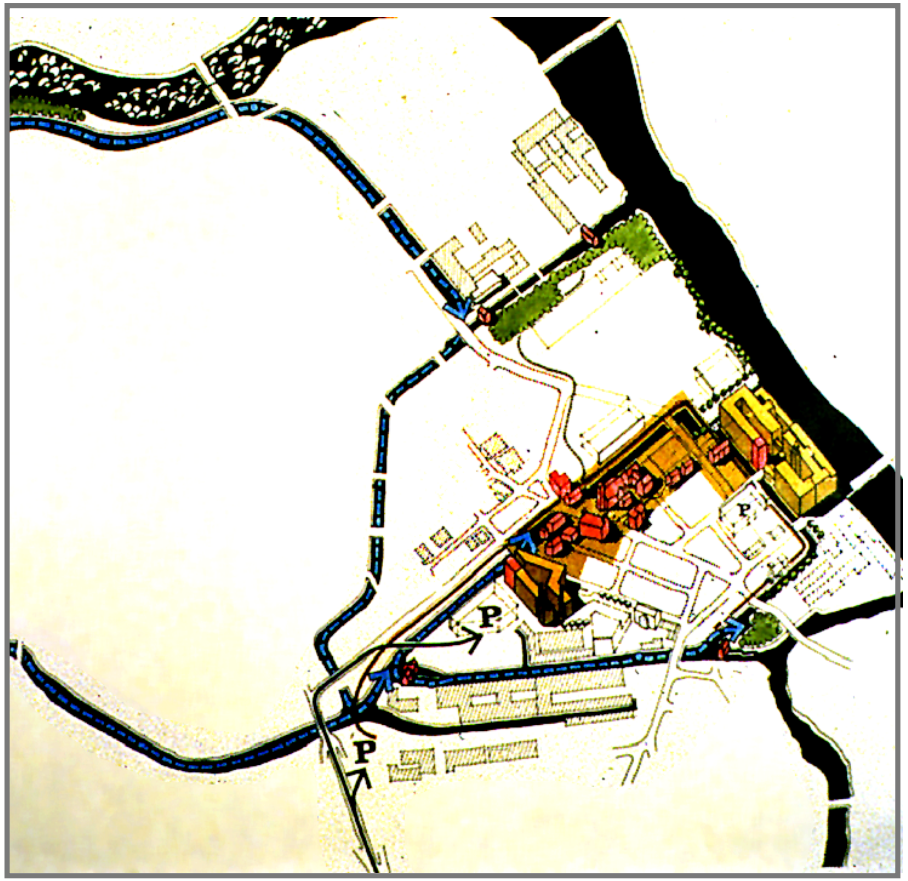
Empty Mill

Grass Roots Workshop

1950年代に至ると、繊維産業はローウェルから全て撤退したことにより、失業率は全米で最高となり、工場の跡地だけが何マイル歩いてもつづく状況だった。

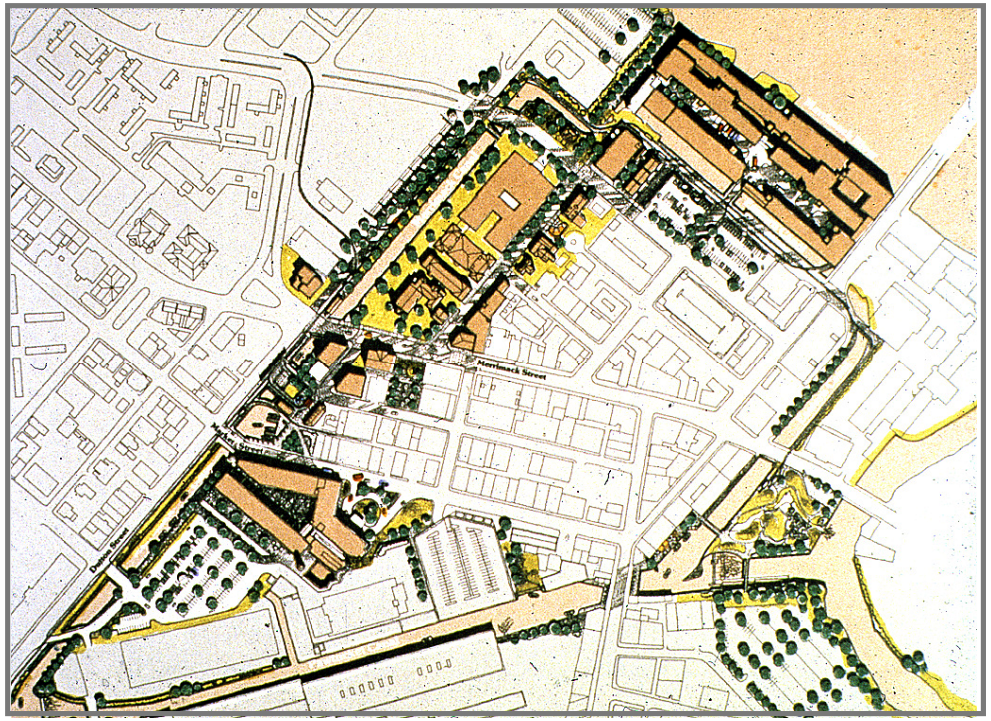
図提供／Prof. Dennis Frenchman, MIT

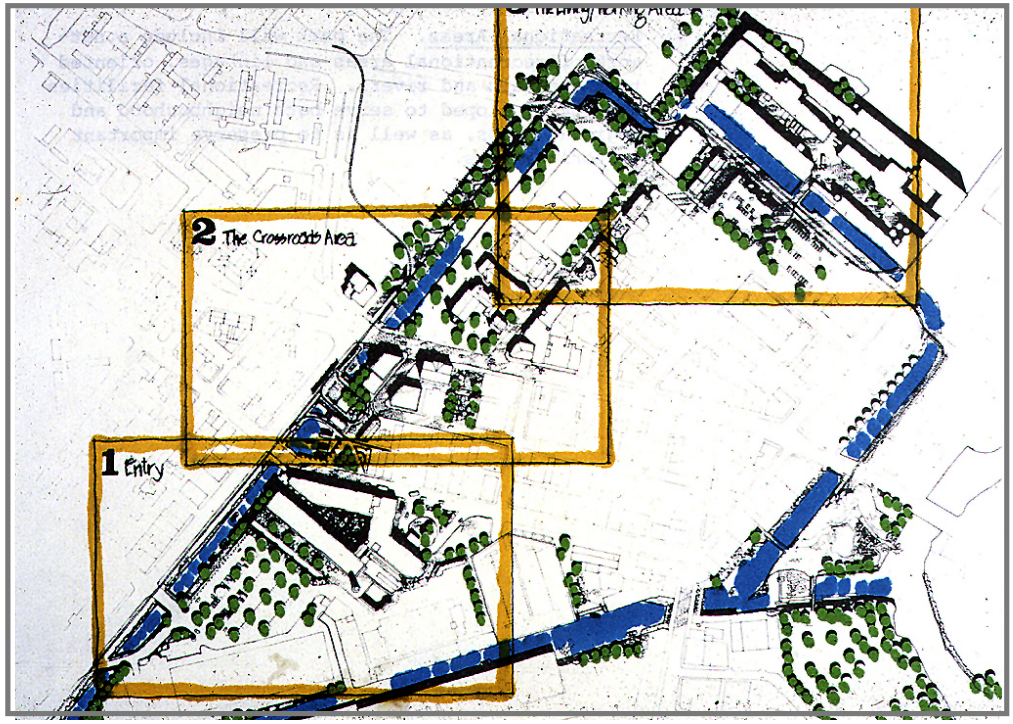




1980年代に、このローウェルに再生の萌芽をもたらしたのは、草の根運動的なコミュニティの努力の賜物だった。Patrick　Moganという一人の高校の校長が、『どんな教科書よりもローウェルを見学することがアメリカの産業革命を学ぶ上で役に立つ』と周りの人々を説いて歩いた。彼は、ローウェルはアメリカの産業革命の歴史上たいへん重要な意味を持つ町であり、遺産としてそれを保存し、新たな解釈を加えて、再利用するべきだと主張した。

図提供／Prof. Dennis Frenchman, MIT





Cross Section　　**Narrative Mapping**

これは新しい形のパートナーシップ・プロジェクトとしてすすんだ。公共の資金はストーリーを持った古い建物の保存に充てられ、特に、ローウェルが最も栄えた典型的な（Cross Section）19世紀の町並みの雰囲気の保存が重んじられた。
また、大学（MIT）の協力によって、それぞれの地域ごとにローウェルのストーリーを表現する手法（Narrative Mapping）がとられた。

図提供／Prof. Dennis Frenchman, MIT

Lowell Mill before **after**

やがてローウェルの価値は徐々に高まり、ついに約５億ドル（500億円）にのぼる民間の投資を引き寄せることに成功した。
これらの取り組みによって、ローウェルは自分の町に新たなイメージを与えることに成功した。

図提供／Prof. Dennis Frenchman, MIT

Boott Mill Restored

Canal View

さらに波及効果として、その後、商業施設や住宅施設にも民間資金が投じられることになった。
また、古い工場や建物は、オフィスや住宅、研究施設や大学等として再利用されている。同様に、これをきっかけに運河沿いの遊歩道整備が行われる等、公共投資によって新しい公園や劇場なども建てられた。

図提供／Prof. Dennis Frenchman, MIT

Wiz boat

Boott Museum

Trolley

建物や町並みの保存再生という点も評価されるが、それよりも重要な点は、コミュニティが新しいローウェルのイメージをまちづくりに活かしたことである。以前は単なる工業都市であったローウェルが、教育や文化的な香りのする都市に生まれ変わった。

図提供／Prof. Dennis Frenchman, MIT

また、Patrick Moganに因んだ国立パトリック・モーガン・センターでは、高校教育のカリキュラムの一環としてアメリカの産業革命史を学ぶことができる。
現在、この他にローウェルには５つの博物館があり、そこで繊維産業の歴史やアメリカの移民の歴史を展示している。

図提供／Prof. Dennis Frenchman, MIT

Lowell Commission

このローウェルの事例ではローウェルコミッションといわれるコミュニティ主体の地域づくりの組織がつくられたことが重要だった。この組織には連邦政府、州政府、ローウェル市役所をはじめ、文化施設の代表者、大学研究者等の参加者も含めてまちづくりに関する協議が行われた。

町のイメージづくりがきっかけとなってコミュニティを動かし、　その結果、　投資のチャンスが生まれた。公共投資と民間投資が相互補完する形ですすみ、好循環が繰り返されることで、まちが活き活きとしたものに甦っていった。

この事例は、小さな町の単位から、より広域な地域単位まで応用可能な手法を提示している。

産業遺産をはじめテリトリアル・キャピタル（圏域資本）を巡る旅はユニークなストーリーをみつける手がかりになる。この旅は、生産と消費をむすぶインターコネクションであり、地域づくりのあゆみのトレイルであり、その道筋は過去を巡るのみならず、未来へのあゆみに他ならず、現代人の巡礼の旅であり、懐かしい未来との出会いを求める旅でもある。

A key lesson of Lowell

（1）全ての土地には価値がある。

手のつけようもないほど荒廃した産業遺産でも、何らかの価値が隠されている、何らかのすばらしい可能性を秘めていると私たちは考えなければいけない。教育・文化的な価値を磨くこともできるし、経済的な都市開発にそれらを活用していくことも可能である。

（2）ストーリーを持たせる。

都市の再生をこころみる場合、都市のイメージのもととなるストーリーが何であるかを考える。コミュニティにとってユニークな価値となるストーリーは人を引き寄せ、それに投資を呼び込み、雇用をうみ、文化的施設もできる。

（3）変化を可能にするまちづくりの新しいパートナーシップを育む。

都市計画家、政府、民間セクター、教育分野ほかからの参加者によるパートナーシップによって、保存、教育、文化、デザイン、地域経済などのさまざまな領域で成功が導かれる。

（4）独自のストーリーを見つけ出す。

ストーリーはそれぞれ地域によって異なるため、成功事例を模倣することは意味をもたない。独自のストーリーによってコミュニティは育ち、さらに外の人にとっても魅力あるまちづくりができる。

ご清聴 ありがとうございました

総務省・地域の元気創造有識者会議

後藤春彦

hgoto@waseda.jp